



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

神の計らいを信じ、真っ直ぐに生きる人

下五島地区の教会を、この四ヶ月つとめて見て回りました。その中で、貝津教会だけ一度目にたどり着けず、二度目の教会巡りでたどり着きました。国道 384 号線を進んでいくと、貝津教会に分かれる道があります。写真、前は見えると思いますが遠くの方は聖体拝領の時にでも見てください。

この写真を見ると、「ここから貝津教会」というのは分かるはずなのですが、250cc バイクで流しているとマリア様の大きな御像だけが目に入り、「おや？こんなところにマリア様だけぽつんと立っている。保育園も見えないし、どうしてだろう？」考えるうちに通り過ぎて、そのまま国道を進んでしまいました。結局この日は着けずじまいでした。

違う日に、再度貝津教会目指してバイクで出かけました。バイクを停め、気になって写真に収めたマリア様がこれです。そのときようやく貝津教会の案内板に気づき、通り過ぎてしまったのだと分かりました。マリア様に見とれて道を間違えた経験でした。見とれた経験ありますか？

どうすれば、間違えることなく貝津教会に行けたのでしょうか。本日の福音朗読によると、「そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した」とあります (1・39-40) 道に迷わず、エリサベトに挨拶しています。考え事をしていたらこうはいかなかったでしょう。

マリア様は神の不思議な働きかけのことだけを考えていたのでしょうか。本来なら、出来事を受け入れてヨセフは何か言われないうちからヨセフとの生活は続けられるだろうか、いろいろ考えたはずですが、ところがマリアは、迷いは一切横に置いて、ただ一つ、神の不思議な働きかけを喜び合えるエリサベトを訪問することだけ考えたので、道に迷わなかったのです。

神は必ず、目を留めてくださる。心に掛けてくださる。必要なことを見つけたなら、あとは神様に全面的に信頼する。中田神父もそのようにして貝津教会を目指していたら、道に迷うことはなかったのでしょうか。

天に上げられたマリアは、私たちが生涯を通じてどのように生きべきか、模範を示されました。この世では低くされて生きている人、常に主を恐れ敬いつつ生きる人に神は目を留めます。だから神の憐れみ深さを一心に信じて、他のことには気を取られずに生きる。これが大切です。

このように生活する中で教会に集うひとときは、同じ思い、同じ喜びを体験した人と出会うひとときです。ここに集まった人は皆、神が私に目を留めてくださっていることに気づき、感謝しに集まった人です。神が見守っているかどうか気づかないままここに集まっても、少なくともその人も神が呼び集めてくださった人です。

すると、ここに集まって神の計らいを喜び合う私たちは、だれもがエリサベトであり、だれもがマリアなのです。私たちはマリア、エリサベトなのですから互いに神をほめたたえ、平和のあいさつを交わしましょう。

私たちと私たちの先祖は教会に集い、互いに神のはからいを喜び合いました。残るは「わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに」 (1・55) これが実現するために私たちの応答、次の世代への信仰伝達が必要です。

神のいつくしみ、計らいがとこしえにあることを一心に信じて、次の世代も途切れることなくこの聖堂に集まる。こうして私たちは天に上げられたマリアの生き方は正しいと世に証しし、私たちの人生を幸いな人生とすることができると信じています。